



やりがいを持って働ける労働環境を整備、 2022年度から刷新計画に基づき改革推進



本城しのぶ看護部長

ています。

社会医療法人医翔会札幌白石記念病院（野中雅院長・本城しのぶ看護部長、103床）は、病院理念「いのちと向き合う、こころと向き合う」のもと、入院基本料7対1を算定する急性期病院として地域医療を支えています。1982年に開設。脳神経外科単科の病院としてスタートし、2013年循環器内科、2019年心臓血管外科、腎臓内科（血液浄化センター）を開設、更に、脳神経内科など診療科を増設しながら病院機能を強化。「頭から足の先までの動脈硬化性病変に対応できる病院」づくりを進めています。

2011年に病院を新築移転。2015年に社会医療法人の認定を受け、真狩村や穂別町などへ医師、看護師を派遣するなどし、地域医療を支援する取り組みも行っています。

2015年に社会医療法人の認定を受け、真狩村や穂別町などへ医師、看護師を派遣するなどし、地域医療を支援する取り組みも行っています。

2015年に社会医療法人の認定を受け、真狩村や穂別町などへ医師、看護師を派遣するなどし、地域医療を支援する取り組みも行っています。

急性期一般入院基本料1を算定する病床・58床、SICU12床、回復期リハビリテーション病棟33床を運用。現状、平均在院日数は9.6日で、看護必要度Iは30・6%、在宅復帰率は94・5%となっています（いずれも2022年度実績）。

一般社団法人日本脳卒中学会認定の一次脳卒中センターコア施設として24時間365日患者を受け入れるほか、循環器2次救急、2023年10月からは、近隣の病院とのホットライン連携を整備し、循環器救急の受け入れ態勢も強化しています。また、紹介受診重点診療機関としても稼働しており、地域から紹介された患者の専門的治療や検査等を積極的に受け入れ、地域のかかりつけ医に戻す紹介受診重点診療機関としての機能強化に病院組織を挙げて取り組んでいます。

このほか、脳・循環・腎に関わる専門的治療や検査が必要な患者さんを積極的に受け入れることで、

ていく病院」を目指しています。

診療科別から機能別に病棟を再編、組織の枠を越えた連携も強化

います。認定看護師、専門看護師、特定行為研修等、専門性の高い看護師育成を今後も積極的に進めていくことで、自信を持って看護を実践する看護師が増えていき、結果、患者さんへのより良い看護へと繋がっていくはずと。

看護部長に就任してからeラーニングの導入、院内留学制度、看護学生の臨地実習受け入れ、患者サポートセンターの設置、産休や育休に備えたトラベルナースの活用など新たな取り組みを実施してきました。一方で、診療科が増えるごとに組織が縦割りになっていく点を問題視し、ソフト・ハード両面により変化に柔軟に対応できる体制づくりが急務と感じていました。そこで、2022年度に看護部組織の刷新計画を策定。「看護師がやりがいを持って働ける労働環境を整備し、患者満足に貢献する」を戦略目標に掲げ、それまでの診療科別から機能別に病棟を再編。急性期、回復期リハビリテーション、亜急性期に病棟を編成し、各病棟看護師は、脳神経外科、心臓血管外科、循環器内科など複数科への対応が求められる状況に組織を組み替えました。



「以前は、103床の病床にも

コロナ禍で減少した手術や検査等の件数を回復させ、経営の維持・向上にも取り組んでいます。

経験を重ねて得た看護師としての自信をより良いケアにつなげる

2018年に就任した本城しのぶ看護部長は、「頭から足の先までの動脈硬化性病変への対応を軸とした当院の役割の維持・向上のためには、看護師個々の専門性を高めていくことが今後さらに重要」と述べ、就任以降、看護部の組織改革に取り組んできました。

本城看護部長は25歳の時、札幌市へ移住。留萌市立病院に就職し、脳神経外科病棟に配属となつたことを機に、その後も脳神経外科単科の病院などで勤務し、2009年に現病院の前身となる白石脳神経外科病院に就職しました。

2012年に主任、2013年に病棟科長、2017年に副看護部長にそれぞれ昇格。2018年に看護部長に就任し、現在に至ります。2021年度に札幌市立大

学サードレベルを受講し、13期生として卒業後、2022年に認定看護管理者を取得しています。

サードレベルでの学びを機に、看護部トップマネジャーとして、看護スタッフ個々がスキルを高め、経験を重ねることを重視したマネジメントに取り組んできました。

「どうして自分は看護師を続けているのか。治療を行うのは医師ですが、その前後のケアを行うのは看護師です。患者さんから本当に命と向き合う場面が多くあり、それは、看護師として働き続ける糧となることも多いです。救命の時の回復の時、最期の時など、どの場面においても看護師が居ます。その時々には後悔のない看護を実践していければと思います。日々忙しい中で、個々の看護師が自信をもって看護を実践するためには、知識・技術をきちんと身に付けて、経験を重ねることが大事。そうした環境を整えるのが私の役割です」。

「看護師個々が、知識や技術を向上させていくための院外研修への参加や専門学会への参加費用を支援する環境は組織として整って

関わらず、診療科ごとで看護が完全に分かれているような状態でした。診療科の垣根無く、当院が標榜する診療科の看護を幅広く学び、不得意分野をなくすことで、業務の効率化やケアの質の向上につなげてきました。また、看護主任を中心に、より実践的な手順やマニュアルの新規作成を行うと同時に、内容の改訂を行い、電子カルテと連動させて運用しているEIMakerに組み込むことで、閲覧しやすい環境を整備しました。脳外経験者の看護師が循環器看護も学び、その逆も必然的に展開される状況を作ること、支障なく患者さんを見る。そうしたことがやっ

と少し整ってきました」。

刷新計画をもとに改善に取り組んだ結果、病棟稼働率80%平均が90%まで向上したほか、時間外平均3時間から1.3時間へ削減。離職率は4%前後で推移しています。

看護要員の確保を積極的に行い、看護師116人、准看護師9人、看護補助者43人体制で、診療科に関係なく、来院する患者を全員で看ることに全力で取り組んでいます。職員・患者満足度も向上するなど、成果が見られ始めています。副看護部長時代に開始した看護研究は、本城看護部長が重要視す

る取り組みの一つです。コロナ禍で一時的に止まりましたが、新年度から院内研究発表会を再開させたいと考えています。専門学会への発表も積極的にを行い、病院が支援してくれています。「学会発表することが目的ではありません。研究を行うことで、違った視点で患者さんを見るようになります。患者さんのために何か出来ることはないか？良い方法はないか？と考えるきっかけになればと思っています。また、他の病院の取り組みを知る絶好の機会となり、自身の振り返りや向上に繋げてほしいと考えています」。

看護部長就任後に多職種連携会を立ち上げ、所属部の枠を超えた連携の強化も進めています。透析室では、臨床工学技士が看護師と一緒に排泄ケア、シーツ交換を行うなどタスク・シェア／シフトにも取り組んでおり、今後も可能なところから徐々に拡大していく考えです。

忙しい毎日ですが、通勤の車の中で「オンとオフがリセットできず」。小学5年生になる子どもとキャンプやスキーに行くこと、そして、寝る前に愛犬と戯れながら好きなテレビ番組を観ることもリフレッシュの一つとなっています。